

---

# 出逢いの場

亜衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

出逢いの場

### 【Nコード】

N4000A

### 【作者名】

亜衣

### 【あらすじ】

高校2年生の中村恭平は、友達の坂井大介の誘いで、合コンに行くことになった。そこには恭平の大好きなクラスメイト、水島明菜みずしまあきなも参加すると聞き・・・！？合コンから始まるラブストーリーです。

## 第1話

「恭平！頼むよぉー！！！！なっ？ちよつとで終わるから……」

俺の名前は中村恭平。なかむらぎょうへい高校2年生だ。

帰り道冬空の下、俺は友達さかいたいすけの坂井大介に合コンの人数合わせを頼まれている。

「…ヤダね」

手を擦り合わせて頭を下げる大介に、俺は冷たく言い放った。  
大体さ、俺みたいな無口な奴が合コンなんか行っても場のテンション下げるだけだろ。

行くだけ意味ねえって。

それに……

それに、俺には……

「あーあ。せつかく水島さんも来るのになぁーっ！！！！」

ピクッ

自分の耳が微かに動いたのが感じられた。

俺の右斜め後ろ辺りで叫んだ大介の言葉に反応して。

「水島…？マジで！！？？」

そう。

俺は…同じクラスの水島明菜みずしまあきなが好きだ。

無口で、大人しくて、そこら辺の女子みたいにギャーギャー騒がない所がいい。

身長も150cmちょっとしかないし、顔もほわほわした感じでめっちゃ可愛い。

……最高じゃん？

「な？来て損はないだろ……？」

耳元で大介がゆつくりとつぶやいた。

耳に生暖かい息が吹きかかる。

思わず背中にブルッと寒気が走った。

「キモい。耳元でしゃべんな」

真横にある大介の顔をパンツとはいた。

途端に大介は『ギャン！！』と犬の泣き声みたいな声を出した。

「…ま、来てやってもいいけど？」

俺はまだ倒れこんでる大介に向かって言った。

すると大介はわざとらしく痛がつてた振りをやめて、俺に飛びついてきた。

だからこーゆーのやめろって…

「マジで！？よっしゃー！！お前カッコいいからいるだけで女子達盛り上がるんだよ。俺達だけじゃ……ね……悲しいことに頑張らんと盛り上がらんのよ……」

感情表現の激しいやつだなあー。

俺は思った。

最初と最後のテンションが全然違っじゃねえかよ。

大介はまだ、ははは…と悲しげに笑い続けている。

はあ。

こんな奴らと合コンとかちよつと心配だけど…ま、いい奴だからいっつか。

俺は楽観的に考え、水島が合コンで笑いかけてくれるのを祈りながら、信号機の下で大介と別れた。

## 第1話（後書き）

初めての小説です。

これからよろしくお願いします。

## 第2話

さてさて。

いよいよ合コン当日がやってきた。

柔らかな太陽が照りつける、気持ちのいい日曜日だ。

俺は朝から何となくテンションが上がってしまい、鏡の前に、いつもの3倍以上も立っていた。

自然と顔がにやけてくる。

キモいぞ！キモすぎるぞ俺！！

自分にそう言い聞かせながら俺は食パンをトースターに入れた。

あー、楽しみだなあ！！

俺は食パンの焼き具合を確かめながら、もう一度テンションをあげた。

\*

「おい。恭平ー！！こつち！！」

PM11:00。

ちょっと迷ってしまったが、何とか俺は大介との待ち合わせ場所に到着した。

大介のほかに、数人の男が集まっている。

…男ばかりが集まるって、むさいよな…。

「ここのカラオケボックスでやるんだ。早く行こうぜ！！」

大介が結構大きなカラオケボックスを指差した。  
きらびやかな装飾が施されていて、なんとも目がちかちかする。

「ほらほら。早く行くぞ、恭平」

「お、おう」

俺は曖昧な返事をしながら大介について行っ

\*

「おつそーい！」

女子はもう来ていた。

部屋に入るなりのブーイング。

あーうるせーうるせー。

「いーじゃんかよー。ちょっとだけじゃん」

すぐに打ち解けている大介の社交性に、俺はある意味尊敬した。  
でも俺の目的はただ一つ！！！！

……水島明菜だ。

だが、どこを見渡しても彼女の姿は見当たらない。  
どうかしたのだろうか。

「ごめん！遅れた！」

バンツと音がして、…水島が入ってきた。



「明菜！もう心配したんだからねー！」

一人のちょーケバイ女が口を尖らせた。

「ご、ごめん…」

そんな風に言うなよ。

そんなことを思いながら彼女を見つめた。

今日も水島はめっちゃ可愛い。

ストレートの肩までの髪。

それがさらさら揺れるたびに、俺の心はずつきゅーんと大きく跳ね上がる。

ヤバイ、可愛すぎる…。

俺は彼女をちらちらと見ながら、メニューのオレンジジュースという文字を見つめていた。

### 第3話

「ねね、やっぱ中村君、カッコいいよねー!!」

「……うん」

こんにちは。

あたし、水島明菜です。

今日は佐奈達からの誘いで、合コンに来てます。

ホントは、あたしなんかこんな場所、似合わないんだけど…。

辺りの華やかさを見て思った。

あたしも、佐奈達みたいになりたかったから…。  
もっと、明るい人間になりたかったから…。

度胸試しで、行くことにした。

「あ、私、中村君と歌ってこよっかなー」

隣でジンジャエールをすすっていた佐奈が、突然立ち上がった。

佐奈は今日、すっごく気合い入れてきてる。

メイクもバッチリ。髪型もバッチリ。

整った顔が、更に綺麗に、輝いて見える。

それに比べてあたしは…

メイクもそんなにできないし、髪なんかもいつも通り。

どこをどう細工すればいいのかわかなかつたし、とりあえず、リ

ツプクリームだけ付けてきた。

でも、そんなんじゃ全然足りないよね。

みんな頑張っておしゃれしてきてるのに、あたしだけ普段通り。  
やっぱ浮いちゃうよ…。

「私、中村君狙ってるんだあ。もーカッコよすぎ！…！」

そう言っつて、佐奈は中村君のところに小走り気味で行っちゃった。

…やっぱあたしには無理だあー…。

もう帰りたい…。

あんなふうに男の子誘ったりできるわけないよあ…。  
しかも、憧れの中村君…。

「はあ…」

ニコニコ笑っている佐奈を横目に、あたしは一つ、小さな溜息をついた。

「水島」

「え…？」

誰かに、名前を呼ばれた。

「坂井君…？」

落ち込んでるあたしの名前を呼んだのは、坂井君だった。

### 第3話（後書き）

今回は、明菜視点です。

次回も頑張るんで、よろしく願いしますっ！

## 第4話

…ウザイ。

「ねーねー、いーじゃん。一緒に歌おうよー」  
ただいま、同じクラスの唐木佐奈からきさなに、めちゃくちゃ強引にカラオケを一緒に歌わされようとしています。

「だから、俺、歌苦手なんだって…」  
さつきからそう何度も言ってるのに、彼女は一向にそれを聞こうとしない。

全くなんだってんだ。

人の話はちゃんと聞こうって、小学校の時習わなかったのかよ。

「大丈夫だって、私が一緒に歌うんだからあ」

カンケーねえっつーの。

おめーが歌おうが歌うまいが、俺は絶対歌わねえ。

「いーじゃんよー!」

あー! ! ! 誰か俺をコイツから助けしてくれえ! ! !  
しかも腕に触ってくんなあ! !

そう、思ったときだった。

俺の真正面の、少し離れたところから、優しい、今にも消え入りそうな声が聞こえてきた。

「  
恭ちゃん」

「え……？」

一瞬、周りの音が消えた。  
俺の、心臓の音しか、聞こえなかった。

声を発したのは、頬を真っ赤にして俯いている、水  
島明菜だった。

その隣には…大介？

…何なんだ？

一体大介は何がしたいんだ？

俺の疑いの視線にやっと気づいた大介。

彼はニンマリと、白く小さな歯を見せながら、俺に向かって大きく  
ピースした。

…はぁ！！！？

俺の腕には、まだ唐木がしがみついていた。

「何ター？どーしたの？」

アホかお前は。  
本気でそう思った。

ちゃんと状況ぐらい飲み込んでけて。  
俺は思いつきり唐木をシカトした。

やっと顔をあげた水島の頬は、まだとても赤くて。

なぜかその顔が、とても愛しくて。  
もっと近くで彼女を感じたいと思った。

## 第5話

「おい、大介！」

唐木を何とか追い払った俺は、ニヤニヤしながら近づいてきた大介に声をかけた。

「ん？」

「ん？じゃねーだろボケ！一体あれ、どーゆーつもりだよっ！」

水島の真っ赤になってた頬を思い出す。  
胸が熱くなった。

「何？嫌だったん？」

まだ大介の顔はニヤついている。  
すぐむかついた。

「…嫌って訳じゃ…ねえけどよ…」

半分俯いた気持ちになる自分が嫌で。  
大介だけじゃなく、自分にもむかついた。

そんな俺を見て、大介は口を開き始めた。

「俺さあ、小学校の頃まで、お前の事恭ちゃんって呼んでたじゃん？」

…だっただけ。



まあそんな感じだったとは覚えてるけど。

「で、なんとなくーくそれ思い出しさ。水島に呼ばせたときのお前のが見たくてよぉ」

悪趣味なヤツめ…。

「水島に、じゃんけんして、俺が勝ったら俺の言うこと一つ聞いてもらっていい？ つつたら、あの子純粹だからさ…何も疑わずにいいよって答えたんだよ。で、結局俺が勝って、呼ばせてみたワケ。オツケ？」

何がオツケだ。

ふざけんなつつの。

俺で遊ぶな！！！！

「お前さ、合コン来てるんだから、人のことじゃなくて、自分の彼女探せよ」

俺が呆れたように言ったら、大介は普通に答えた。

「だってお前たち見てるほうが楽しいもん。マジおもしろい」

ハア…。

ま、大介らしいといえばそうだが…。

俺は小学校の頃から全然精神年齢が成長していない大介に何となく安心した。

そんな俺の気持ちに気付いたか気付かなかったのか、アイツは、

「俺ってまだがきだよなあ」

と、一言つぶやいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4000a/>

---

出逢いの場

2010年10月16日23時15分発行